Orchard シリーズ

pwc Presents

K-BALLET
0ρ+0

Petit Collection—Petit, Petit, Petit !

美しい時代へ——東急グループ

pwc Presents

K-BALLET opto

Petit Collection—Petit, Petit, Petit !

2022年9月30日（金）～10月1日（土）〈4公演〉

KAAT 神奈川芸術劇場〈ホール〉

9月30日（金）12：30
9月30日（金）17：30
10月1日（土）12：30
10月1日（土）17：30

主催・制作：Bunkamura／K-BALLET
特別協賛：PwC Japan グループ
協賛：WACOAL

K-BALLET Optoとは
Bunkamuraオーチャードホール フランチャイズカンパニーであるK-BALLET COMPANYの新プロジェクト。渡辺レイ指揮の下、新進気鋭の振付家によるオリジナル作品や他ジャンルとのコラボレーションなど、ダンスの魅力を多角的に捉えた作品で、K-BALLETの新たな光（=Opto）を生み出し、多くの方々に鮮烈なライブ体験を提供することを目的にしている。

本日はK-BALLET Opto旗揚げ公演となる「Petit Collection—Petit, Petit, Petit !」へご来場いただき、誠にありがとうございます。
バレエ芸術は、人間が生み出した類稀な文化として、時代を超え受け継ぐべき財産であり、私もその責務を担う者として、四半世紀にわたり真摯に活動して参りました。その根底には、伝統の継承とは現代に生きる我々が、新たな価値を付加してこそ可能だという信念があります。その価値の創出には、多くの才能や作品との出会いが不可欠です。K-BALLET Optoは、現代を生きるさまざまな芸術家たちとの交流を通じて、舞踊の多彩な可能性や深層に触れ、新たなOpto（＝光）を探る意欲的な活動を使命としています。設立から24年が過ぎ、揺るぎない実績を手にしたK-BALLETが見せる次なる光とは。我々芸術家を観客と繋ぐ殿堂として、常に挑戦的な機会を提供してくれるBunkamuraとともに、その答えを求める旅が今日始まります。
最後に、特別協賛いただいておりますPwC JAPANグループ様、株式会社ワコール様はじめ、本公演実現のためにご尽力賜りました関係者各位に厚く御礼申し上げます。また、観客の皆様の温かいご支援に心より感謝いたします。

K-BALLET COMPANY／Bunkamuraオーチャードホール
芸術監督　熊川哲也

Petite Ceremonie（プティ・セレモニー）"小さな儀式"〈アジア初演〉

音楽 ｜ A. ヴィヴァルディ「四季」ほか
振付 ｜ メディ・ワレルスキー
振付指導 ｜ シルヴァン・スネズ
舞台美術 ｜ メディ・ワレルスキー
照明デザイン ｜ ボニー・ビーチャー
衣裳デザイン ｜ リンダ・チャウ／メディ・ワレルスキー

この作品は、2011年、カナダのバンクーバーにあるバレエ・ブリティッシュ・コロンビアで初演された。
ちょうどいい空間、完璧なバランスを求めている人の集まり。男性と女性、異なる思考。
創作のはじめにダンサーに頼んだ。「箱の中で生活すること」が自分にとってどういうことを意味するのか語ってほしいと。その結果生まれたのがこの作品だ。
ダンサーには思考力や即興性のほか、パーソナルスペースにとどまらずに個人が集団に与える影響を意識することが求められる。
何かに取り組む際、男性と女性とでは取り組み方が異なっていたり一致したりする。そういう男性と女性の違い、混沌と秩序の対比を示したかった。
正装した男女が儀式的で官能的な雰囲気の中、エレガンス、ジャグリングなどの滑稽なユーモア、感情の爆発がぐるぐると早いテンポで展開していく。予測不可能で奇妙な夢を見ているかのような不思議な時間が流れる。
音楽は、モーツァルト、ベッリーニ、ロジャース＆ハート、ヴィヴァルディを使用している。
新しいものに触れ、考え、疑問を持ち、ダンサーを通して自分の一部を見るような体験になることだろう。
『プティ・セレモニー』は不条理で崇高なダンスであり、すべての要素は一見ちぐはぐなようだが全体の一部をなしている。

メディ・ワレルスキー
Medhi Walerski

フランス出身。パリ国立高等音楽院で学んだのち、パリ・オペラ座バレエ団、フランス国立ラン歌劇場バレエで活動。2001年、ネザーランド・ダンス・シアター（NDT）2に参加、03年NDT1に昇格。NDT在籍中に振付も始め、NDT以外にベルン・バレエ、ヨーテボリ・オペラ・バレエ、バレエ・ブリティッシュ・コロンビアなどのカンパニーに作品を提供している。20年7月よりバレエ・ブリティッシュ・コロンビア芸術監督。彼の振付作品は以下の通り。

Moume – Up and Coming Choreographers, Netherlands Dance Theater (2006)
Mammatus – Netherlands Dance Theater 2 (2008)
Underneath – Netherlands Dance Theater 1 (2009)
Words Failed Me – Bern Ballet, Switzerland (2010)
LaLaLand – Goteborg Ballet, Sweden (2010)
Petite Ceremonie – Ballet BC, Canada (2011)
Blink of an Eye – Netherlands Dance Theater 1 (2011)
Chamber – Netherlands Dance Theater 1 (2012)
Prelude – Ballet BC (2014)
Aureum – Netherlands Dance Theater 2 (2015)
GARDEN – Netherlands Dance Theater 1 (2016)
SOON – Netherlands Dance Theater 1 (2017)
Romeo + Juliet – Ballet BC, Canada (2018)
ORAWA – Ballet State of Georgia (2018)
SWAY – Netherlands Dance Theater 2 (2019)
Silent Tides – Netherlands Dance Theater 1 (2020)
just BEFORE right AFTER – Ballet BC (2022)

Petite Maison（プティ・メゾン）"小さな家"〈世界初演〉

音楽 ｜ S. ラフマニノフ「パガニーニの主題による狂詩曲」ほか
振付 ｜ 森 優貴
舞台美術・衣裳デザイン ｜ 森 優貴
照明デザイン ｜ 伊藤雅一

基本的に創作活動において最も重要なのは自分自身の世界を生み出すことができる音楽に出会うことであり、今回ラフマニノフの「ラプソディ」をメインとして選曲。ゆがんでいく、いやゆがんでいた世界を見つめ実感して行く中で、今回選曲した曲を自分の体内に取り入れ血として流れるまで何度も聴き、天使と悪魔の分断世界が、描かなければならないテーマが「分断」だと本能が声にした。分断とは断ち切って別れ別れにすることそして一つのつながりを持っていたかもしれない可能性を断ち切ること。
現在、日常で、より強くより濃く認識し意識するようになったこの分断。
歴史的に見ても人類は宗教と思想、格差、そして文化と価値観の違いを利用し「分断」を繰り返し争い合い歴史を紡いできた。
同じ胎内から生まれた人類同士が恐怖を与え、洗脳し合い、管理し合い、支配する繰り返し。
私たちが属する集合体である社会や国家のみに限らず、家族や、友人など小さいながらも個人的には大きな価値を持つ日常的環境でも同じである。
同時に空間的分断も精神的分断も常に内側と外側で自らの役目を演じ、そして真逆にも自らを放り出し安らぎを求める。2つの対等は表裏一体であり、何を、どの思想を用いて、どう伝え、どう捉えるか？ によって大きく左右される。
真実は闇の中。しかし真実では必ずどこかでつながっているかもしれない。罵り、裏切り、受け入れ、抱きしめ、救う。時にチャーミングに、時に皮肉であり、時にポエティックに。そして何よりも寓意的に。誰もが持っていてほしい「小さな家」。ただありのままの自分を受け入れてくれる小さくても飾らずにすむ場所。その小さな場所では、外では分断されている事がもしかしたら繋がるのかもしれない。天使と悪魔は憎み合わず愛し合えるのかもしれない。小さな家＝自分だけの大切な場所。理解を必要としない、受け入れ受け入れられるだけの「小さな家」。たとえ、私たちが常に何かを分断し、何かから分断されようとも、必ずどこかに持つべき、そして見つかる場所。

森 優貴
Yuki Mori

貞松・浜田バレエ団を経て1997年にドイツ・ハンブルクバレエスクールへ留学。ニュルンベルクバレエ団、シュテファン・トス率いるトス・タンツカンパニーに在籍。2005年第19回ハノーファー国際振付コンクールにて観客賞と批評家賞を同時受賞。平成19年度文化庁芸術祭新人賞受賞。「WINTERREISE-冬の旅」再演により平成23年度文化庁芸術祭大賞受賞。12年9月ドイツ・レーゲンスブルク歌劇場ダンスカンパニー芸術監督に就任。日本人初の欧州の公立劇場舞踊部門における芸術監督となる。就任後、次々に新作を発表。ストラヴィンスキー『春の祭典』、ラヴェル『ボレロ』、『ベルナルドアルバの家』などの大作を発表するとともに、ダンスサスペンス『The House』、新改訂版『ドン・キホーテ』などの完全オリジナル作品演出振付作品を手がけ、就任後ドイツ舞台芸術総合誌「DIE DEUTSCHE BÜHNE」の表紙カバーを飾るなどドイツ国内外の芸術メディアから「緻密で繊細な演出と構成力を強みとし音楽性豊かにダンス作品を生み出す、日本人振付家が率いる今最も注目するべきダンスカンパニー」と評価される。ドイツ舞台芸術協会が舞台芸術作品から最も優れたアーティストを選出し賞を贈呈している芸術アカデミー賞『der Faust』の振付家／振付作品の部門でダンスサスペンス『The House』が最優秀賞にノミネートされる。2019年、芸術監督を退任し日本に拠点を移す。次々と話題の新作を発表すると同時に、宝塚歌劇団にて講師を務めるほか振付にも携わるなど幅広く活動している。

Petit Barroco（プティ・バロッコ）“小さな真珠（ゆがんだ真珠）”〈世界初演〉

音楽 ｜ D. スカルラッティ = チャールズ・エイヴィンソン「合奏協奏曲第5番 ニ短調」ほか
振付 ｜ 渡辺レイ
舞台美術・衣裳デザイン ｜ 渡辺レイ
照明デザイン ｜ 伊藤雅一

「バロック」はポルトガル語で “Barroco”（バロッコ）、この言葉には「ゆがんだ真珠」という意味がある。バロック時代の前、ルネサンス時代は建築、絵画、音楽、すべてにおいてバランスの取れたものが美しいとされたけれど、バロックになるとそれが崩れる。バランスの取れたものではなく「ゆがみ」に注目し、そこが美しいのだと。完璧なバランスで理性的に整ったものではなくて、ちょっとゆがんでいて感情的で動的なものは、一見ゴテゴテしているけれど、違う角度から見たら、すごく神秘的だったり、均整の美とは異なる良さ、美しさだったりがある……そこからイメージが湧いてきた。「完璧でなくゆがんだものにひそむ美」、それと「ジェンダー」をテーマにした。
男性から見る完璧な女性とはどういうものか。どんなに着飾って美しく見えるようにしている女性でも、裏には秘密があるかもしれないし、どういう人間なのかは完全には理解できない。わかり合えていると思っていても本当の意味では理解しきれていない。誰にでも人には見せない秘めた部分があり、どんなにパーフェクトに見えても人にはゆがんだ部分がある。実はそこにこそ真のかわいさとか、強さがあるのではないか。
男性、女性、両方にジェンダーの縛りがまだあるけれど、どちらももっと自由でいい。特に女性はさまざまな制約から解放されてもっと自由でいいんじゃないか。この作品は、解放された時に立ち現れてくる女性本来の美しさを描いている。そしてそういう女性に対して男性はどういう態度をとるのか。結局、人間対人間の関係性を築いていくのではないか……そういうことを表現したい。
作品の構想を練る初期の段階から衣裳として下着を使用したいというアイディアがあった。カタログをめくっていて出会ったのが Salute。これだと思った。身に着けると自信が持てて、テンションが上がる、堂々としていて自分らしくいられる。また、私はあまり暗い作品が好きではなく、自分の作品も暗くなるのはあまり好きではない。メッセージには真剣な意味があるけれども見終った後には明るくなると思う。

渡辺レイ
Rei Watanabe

群馬県生まれ。1993年オランダのネザーランド・ダンス・シアター2に入団。その後、リヨン・オペラ・バレエ、ヨーテボリ・オペラ・バレエ団、ネザーランド・ダンス・シアター1、クルベルグ・バレエ団で活躍。2000年マルティーノ・ムラー振付『ロミオとジュリエット』のジュリエット役でベストダンサー賞を受賞。キリアン、フォーサイス、エック、ナハリン、インガーなど数多くの作品の主要ロールを踊る。06年よりフリーランスのダンサーとして活躍、12年に拠点を日本に移しOptoを結成。その後、16年にはK-BALLET COMPANY Ballet Gentsのために『The time of evocation』を振付、17年、熊川哲也との共同振付・出演による『Fruits de la passion ～パッションフルーツ』でK-BALLET COMPANY公演に参加し、18年には同バレエ団で「FLOW ROUTE」を振付。その後、19年9月にK-BALLET COMPANY舞踊監督に就任し、現在はK-BALLET Opto舞踊監督を兼任する。

K-BALLET Opto 誕生は時代の必然

M 森 優貴 × **R** 渡辺レイ

森 優貴と渡辺レイは、ともに20年間、ヨーロッパで活動してきた。二人ともクラシック・バレエを身につけ、ヨーロッパではコンテンポラリー・ダンスのカンパニーに所属していたところも共通している。世界のダンスシーンのメインストリームに身を置き、同時代の振付家が作る作品を踊ってきた二人。この二人がK-BALLET Optoの旗揚げ公演のために作品を作り、世界初演される。二人にコンテンポラリー・ダンスに進んだ経緯とK-BALLET Optoへの期待と意気込みを語ってもらった。

自由に自分を出せる何かを探して

――クラシック・バレエからコンテンポラリー・ダンスへ移行されたのはどうしてですか。

R クラシック・バレエの厳しい訓練をしている中で、なんでもっと自由に動けないのかという感覚が生まれてきました。16歳ぐらいの頃ですね。バレエ以外で自分を出せるものがあるのではないかと思いつつ、当時海外に住みたいという憧れもありました。そうして20歳の時にヨーロッパに行ってオーディションを受け、コンテンポラリー・ダンスの経験がないままNDT（ネザーランド・ダンス・シアター）2に入りました。新鮮でした。イリ・キリアンの舞台を見たとき、すごい！ こういう世界があるんだな、ああ楽しいな、自分も舞台に立ちたいなと思ったんです。

私がいたカンパニーはどこでも、ベースはクラシックです。クラシックの基本があるからこそコンテンポラリーという枠から外れた動きができるのだと思います。やっぱりクラシックの基本っていうのは絶対だと思います。

コンテンポラリー・ダンスを踊ってきた自分が、今クラシックをやったらもっと楽しいだろうと思います。クラシックもコンテンポラリーも両方やるからどちらも楽しくて、自分の中に可能性が見えてくるのではないでしょうか。

作る人の下にいて作品誕生に関わりたい

M 僕は4歳から子どもミュージカルをやっていたんです。毎年オーディションをやって公演があり、演出家の先生が来て作品を作るという環境にいて、ミュージカルをやっていきたいと思っていました。それならバレエをやらないといけないということでバレエを始めたんです。いつの間にかバレエにのめり込みました。同年代の男の子が増えてきて、一緒にお稽古して競い合うのが楽しい。でも僕は技をどうのというより、振付家が作ったものを踊りたかった。一から作ることが好きだったんです。ハンブルク・バレエスクールに留学するんですが、卒業試験として作品を作らないといけないし、他の子が作った作品に参加しないといけない。そんな風に必要性のある課題として創作に携わってきました。

僕の場合、バレエからコンテンポラリーへ切り替わったというよりも、作る人の下で生まれてくる作品にずっと関わり続けてきた結果としてこうなったということですね。

K-BALLET Optoが誕生したことの意味

――ヨーロッパと日本、ダンサーにとって大きな違いはなんでしょうか。

R 芸術が社会や生活の一部だということでしょうか。

M ヨーロッパは、プロのダンサーを目指すための教育機関があって、そこを卒業した子たちがプロの世界に入ってきますが、日本はもともとお教室文化で、どこからがプロかという垣根が曖昧。それを熊川さんが変えた功績は大きいですよね。今は日本でプロとして踊ろうって子がいますから。あとは、一個人の考えですが、ヨーロッパでは「芸術は人類が生きていく上で必要なもの」と思っている人が多いと思う。それは日本とは違うかなと思います。

R うん、そう思う。

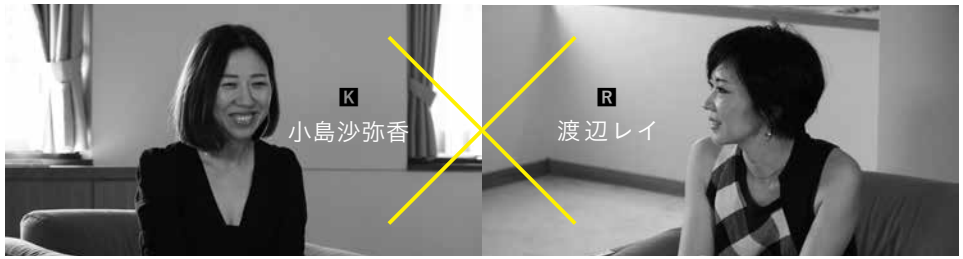
M コロナ禍になって、エンタメ含めいろいろなことがストップして、やっぱり芸術って必要だよねっていう声が上がったじゃないですか。でも、上がるだけ、思うだけ、なんです。芸術と共に生きてきていないから。お家でつながり守られている日本の古典芸能は別ですが。

R でも、熊川芸術監督もそうだけれど私たちはヨーロッパに行って「芸術は生きていく上で必要」、ということを体感してきているわけです。芸術はどれだけ人間に必要で欠かせないものであるかを、私はもう意地でも次の世代に伝えてつなげていきたい。いいものを自己満足に終わらずに発信していく。それを若い子に感じてもらいたいです。

M 今回K-BALLET Optoが立ち上がった。これまで日本のダンスシーンを第一線でリードしてきたK-BALLETが海外のトップカンパニーと同様にバレエとコンテンポラリー・ダンスの両方を真剣にやる……この価値・意義はものすごく大きいと思うんです。

R 熊川芸術監督がこれまで築き上げたバレエ界、そこに違う色、波を入れるっていう彼の寛大さと、後世に伝えていく環境を提供してくれたことがすごくありがたいなと思います。継続していいものを作り、ダンサーが踊ってお客さまに見てもらう、それを繰り返す。彼に感謝の気持ちを伝えたいなと思うから、それはもう必死です。私が経験してきたことをK-BALLET Optoという場所を借りて次の世代に伝える、発信していくことが私たちの進む道だと思っています。

M 演出・振付を熊川哲也という一人の作家が作り直しながら新たな古典作品を作っていくことによって、古典は生き延びていくわけじゃないですか。熊川さんは時代の流れ、価値観の変化に向き合いながら、熊川版をお客さまに見せる。それを20年続けたところで、K-BALLET Optoが登場する。とても価値あることで時代の空気を感じているんだと思います。



Salute チーフデザイナー・小島沙弥香×渡辺レイスペシャル対談

進化のための刺激＝半歩先の未来をお見せする

『Petit Barroco “小さな真珠（ゆがんだ真珠）”』（渡辺レイ振付）では、ダンサーはSalute（サルート）のキャミソールを身に着けています。Saluteのチーフデザイナーである小島沙弥香さんは、この作品に「他人からの評価のためや、だれかに媚びるのではなく、自分に自信を持つことの強さや美しさを応援したい」というSaluteの想いと共通点を感じ共感したことからコラボレーションが実現しました。クリエイターであるお二人は、いつも半歩先の未来を見つめています。未来をお客様に提示する難しさを語り合いました。

小島沙弥香（こじま さやか）
ワコールに入社し、別ブランドを経験したのち、40年続くブランドSaluteを担当して13年。現在、Saluteのチーフデザイナー。

半歩先の未来をお見せする難しさ

R 応援してくださるお客さまに半歩先の未来をお見せしたいと考えています。そこには葛藤があります。現状のままだと停滞する、でも先へ行き過ぎるとお客さまはついてこられなくなってしまいます。

K 同感です。Saluteにも根強いファンがいてくださるのですが、でも、今のお客様以外の層の方も今のSaluteを好んでくれるかといったら、そういうわけではない。先へ行きすぎたらついてこない、変わらないままでも、新しい出会いがない。少しずつ先へ行く。そのバランスのとり方や見極め方が一番難しい。

R 時代の流れとともに進化しなければいけないと思います。保守的でいるのは大切で、そこにスパイスをかける。それが進化になると思うんです。見たものに対して拒絶するお客さまがいたとしてもおもしろいと思ってくれるお客さまは必ずいる。そういう人が少しずつ増えていくのが進化だし、そういう挑戦をしない限り新しいものは生まれないと思うんですよね。そこには労力が必要、作る側も挑戦的でないとね。

K 本当にそう思います。刺激ですよね。何か新しい刺激。とはいえ、どのような刺激をどこまで加えていいのか？ 意外についてきてくれたりしたら、「あ、これはあり」か、じゃあもうちょっとやってみようというふうにいつも模索しています。

進化のための具体的な刺激、スパイスとは

K 今までに見たことがないものです。Saluteを集めてらっしゃる方が、今までなかった色使いやレース使いが施されたり、新しい手法でつくられたものに出会った時は刺激だと思います。

R ヨーロッパにいた時から感じていたのですが、ダンスは20世紀に入ってもうすべてが出てしまっているんです。「新しさ」にばかりフォーカスして、人間に共通していることを忘れかけてきてるんじゃないかと思います。新しいものを作り出そうということよりも、共感できる何かを探っていきたいと思いますね。

だからSaluteのような美しいものを着て、何かそこで感じるわけじゃないですか。「あ、これすごい気分良くなるな」って。その感情だけで十分だと思うんですよね。

Petite Ceremonie

堀内將平　山本雅也　小林美奈　成田紗弥　山田 蘭　岩井優花
関野海斗　戸田梨紗子　グレゴワール・ランシエ　佐伯美帆　本田祥平　田中大智
塚田真夕　辻 梨花　武井隼人

Petite Maison

日髙世菜　杉野 慧　栗山 廉　吉田周平　栗原 柊　高橋怜衣
辻 久美子　世利万葉　髙橋芳鳳　中井皓己　丸山さくら

Petit Barroco

飯島望未　石橋奨也　奥田祥智　山田夏生　吉田早織　金 瑛揮
栗山結衣　吉岡眞友子　岡庭伊吹　島村 彩

Apprentices

Petite Maison　鳥羽瑞穂　　Petit Barroco　清水理那

pwc

The New Equation
変わりゆく世界で成功し続けるために

The New Equation は、PwC の成長戦略です。
多岐にわたる分野の多様なプロフェッショナルがスクラムを組み、
「人」ならではの発想力や経験と「テクノロジー」によるイノベーションを融合しながら、
ゆるぎない成果を実現し、信頼を構築します。

It all adds up to The New Equation.

PwC Japan グループ
PwCあらた有限責任監査法人　PwC京都監査法人　PwCコンサルティング合同会社
PwCアドバイザリー合同会社　PwC税理士法人　PwC弁護士法人

www.pwc.com/jp

PwC Japan グループは、日本における PwC グローバルネットワークのメンバーファームおよびそれらの関連会社の総称です。
各法人は独立して事業を行い、相互に連携をとりながら、監査およびアシュアランス、コンサルティング、ディールアドバイザリー、税務、法務のサービスをクライアントに提供しています。

© 2022 PwC. All rights reserved. PwC refers to the PwC network member firms and/or their specified subsidiaries in Japan, and may sometimes refer to the PwC network. Each of such firms and subsidiaries is a separate legal entity. Please see www.pwc.com/structure for further details.

pwc Presents

Orchard シリーズ

K-BALLET
opto

Petit Collection
—Petit, Petit, Petit!

芸術監督／企画・構成	熊川哲也
舞踊監督	渡辺レイ
バレエ・マスター	西野隼人（Petite Ceremonie）　酒匂 麗（Petite Maison）
〔TECHNICAL STAFF〕	
照明デザイン	伊藤雅一
照明操作	株式会社 流（RYU）
音響	貫井政仁（N-1 Audio）
大道具・小道具	株式会社ザ・スタッフ
舞台監督	狩俣康徳（株式会社ザ・スタッフ）
舞台監督助手	川原卓也
衣裳製作	K-BALLET
衣裳協力	Salute（株式会社ワコール）
トランスポーテーション	株式会社トランスウェブ
協力	株式会社矢島聰子事務所
企画	K-BALLET
制作	Bunkamura／K-BALLET
〔Bunkamura〕	
エグゼクティブ プロデューサー	加藤真規　森田智子
チーフ プロデューサー	児玉晶子
プロデューサー	大宮夏子　肥田 薫　阿部未香
票券	中村真麻
〔K-BALLET〕	
チーフ プロデューサー	高野泰樹
プロデューサー	三輪奈未
制作統括	鈴木奈々子
カンパニーマネージャー	水谷真弓
広報	安藤歌穂
映像制作	星野一翔
衣裳製作	川島映子　東田景子　関口万里乃
〔PROGRAM STAFF〕	
アートディレクション・デザイン	アトリエタイク（臼田香太・飯島麻奈美）
編集	結城美穂子
写真	瀬戸秀美
	K-BALLET COMPANY
印刷	株式会社東京印書館
制作・発行	Bunkamura／K-BALLET
主催	Bunkamura／K-BALLET
特別協賛	PwC Japan グループ
協賛	株式会社ワコール

K-BALLET
opto